笑いと創造

第二集

ハワード・ヒベット 大学教授
日本文学と笑い研究会 編

勉誠出版

笑いと創造　第二集

編　集　ハワード・ヒベット
　　日本文学と笑い研究会
発行者　池嶋洋次
発行所　勉誠出版㈱
〒102-0085 東京都千代田区六番町六-四
電話（〇三）五二一一五-九〇二一
平成一二年三月三一日　初版発行

印刷　㈱太平印刷社
製本　㈱エイワ

ISBN4-585-04037-4　C1093

メキシコの先住民の笑いについての一考察

長谷川二ナ

はじめに——メキシコ文化の笑いを考える上での諸問題

メキシコ文化の笑いを考えるまえに、まず、現代のメキシコ文化について知っておくべき基本的な問題がある。それは以下のようなものだ。

(1)一五一九年以来のスペイン人による征服の結果として、土着の先住民文化は、絶滅されるまでには至らなかったものの、明らかにメキシコ文化の主流から、片隅に追いやられるしかなかったという歴史的事実。(2)征服以来、徐々にスペイン人と先住民の混血が進み、「メスティソ」と言われる混血者の文化が生まれたとはいえ、必ずしも「メキシコ文化＝先住民文化とスペイン文化の結晶」とは限らないということ（実際、先住民の文化は征服以来、約五百年間にわたり、絶えず屈辱を受け、弾圧されてきたにもかかわらず、現代のメキシコにおいて先住民文化の影響は依然として強い）。(3)「メキシコ国民の殆どが混血文化を共有している」という建前のもと、純粋な先住民の文化をマイノリティの問題に過ぎぬとしてきた二十世紀前半のメキシコ文化論は、看過できぬ大きな問題を抱えていること。

メキシコといえば、たとえばディエゴ・リベラの壁画であり、あるいはJ・Gポサダの骸骨画といったメスティソの混血文化をイメージする人が多いであろう。したがって、メキシコの笑いといえば、このメスティソの笑いと

思われがちと思われる。しかし、現実のメキシコの文化は、上記の理由からきわめて多様である。それは大きく分けて、都市の白人を中心とした、「新大陸」において西欧文明の再現を求める文化、先住民と征服者の混血した人々からなるメスティソの文化(人口的にはこのグループが七割以上を占める)、そして西欧の征服以前の、祖先からの伝統を依然として保つ、先住民文化の三つに分けられる。これらの三つの文化は相互に浸透しあいながらも、同時にコミュニケーションに齟齬をきたし、高い壁に隔てられている。山奥に暮らす先住民のグループは貨幣経済の洗礼を受けながらも、都市の白人文化の恩恵から遠く離れており、同時に都市の白人層は先住民をタテマエでは「インディヘナ」と、一見、尊重するかのようなポーズを取りながら、その実「インディオ」と蔑視し、その文化的伝統を無価値なるもの、近代化＝西欧化の足を引っ張るものと見なしている。

日本の常識から考えれば信じられないであろうが、メキシコでは「インディオには笑いがない」という予見、偏見にとらわれている人々が多い。そして、同時に伝統的な文化を維持する先住民グループにとっても、都市の白人層の価値観は、彼らの想像の外なのだ。この三者のあいだの壁を越えることは容易ではない。そしてそれらの文化は激しくせめぎあっており、公式に言われるように渾然一体となった状態であるとはとうてい言い切れない。たとえばメキシコシティや地方の都市で見るテレビのコマーシャルを見ると、そこに登場するキャラクターは、ことごとく金髪、碧眼の純然たる白人ばかりであり、国民の大半を占める肌の黒いメスティソ、先住民のタレントが登場することは皆無に近い。

日本ならば、ビートたけしやとんねるずのギャグは北は北海道から南は九州、沖縄まで、ある程度の均一性をもって受け止められ、笑いを喚起するだろう。しかし、メキシコではそれは不可能に近い。本来、笑いは社会的に流通すべきはずのものだが、その流通が切断され、その混乱のなかに苦悶しているのがメキシコなのである。したが

って「メキシコの笑い」という問題を考える者は、きわめて困難な立場に立たされる。「メキシコの笑い」とひと言で言っても、欧米あるいは日本など、文化的な統合が進んだ地域の人々が考えるほどに、ことは簡単ではないのである。

Ⅰ　インディオの笑い――ラテン世界出身の人類学者二人の研究に照らして見て

(1)「インディオには笑いがない」という説のひとつの来歴

メキシコの先住民、オトミ族を研究した学究の労作が二冊ある。その一つはイタリア出身の人類学者ルイジ・トランフォ（Luigi Tranfo）の『メスキタル地方のあるオトミ族の村における生活と呪術（Vida y magia en un pueblo otomí del Mezquital）』（México: Colección Presencias No.34 Dirección General de publicaciones del Consejo Nacional para la Cultura y las Artes & Instituto Nacional Indigenista, primera impresión 1974 / segunda reimpresión 1990）で、もう一つはフランス出身の人類学者ジャック・ガリニエ（Jacques Gallinier）の『世界の半分―オトミ族における体と宇宙観（La mitad del mundo: cuerpo y cosmos en los rituales otomíes）』（México: U.N.A.M / Instituto Nacional Indigenista / Centro de Estudios Mexicanos y Centroamericanos, 1990）である。筆者はこの二冊を、メキシコにおける先住民の笑いという問題を考える上で、貴重な示唆を含んだ報告であると考え、ここで取り上げることとした。なんとなれば、この二人の人類学者は、共にラテン世界の同じ文化に属しながら、同様に研究対象としたオトミ族の笑いについて、真っ向から対立する見解を抱くに至ったからである。『メスキタル地方のあるオトミ族の村における生活と呪術』は、トランフォが一九七二年から七十三年にかけて、メキシコのメスキタル地方のフチトラン村を訪れ、オトミ族の伝統的医療（呪術）をフィールドワークした成果をまとめたものだが、同書のなかで、トランフォ

はオトミ族の笑いについて、度々興味深い指摘をおこなっている。「私はフチトランに滞在しはじめたその時から、村の人々に親切にしてもらった。男たちが不在の家、あるいはスペイン語の話せない老婆が留守番をしている家を除いて、私は通訳と共に、村のほとんどの家を訪ねた。スペイン語の話せるものは、一般的な世間話をしてくれたし……誰もが私の下手なオトミ語に微笑んだものであった。だが、挨拶が済んだあと、私を訪ねてくる者はいなかったし、また、自分の家に招き入れてくれた者はわずか二、三人しかいなかった……一般にオトミ族は他の部族と比べて、ずっと友好的だと言われているが、私にはとうていそうは思えなかった」(同書P59～60)

と、トランフォは、オトミ族は無愛想で、外部に対するコミニュケーションを望んでいないように見えると述べ、このコミュニケーションに対する無関心は、言葉の問題によるものではなく、オトミ族の性格の根底にある、根強い不信感によるものだと指摘している。そして、この不信感はかならずしも一般に指摘されるような、スペイン人による先住民の征服という歴史の影響ばかりとは言い切れないと断定する。トランフォはオトミ語の単語をわずか五十語しか知らなかったとはいえ、フチトラン村の住民の四割はスペイン語を話せたのだから、オトミ族の人々が彼と意思を通じようと思えば、それは可能だったはずだというのである。また、トランフォは、オトミ族同様、植民地の悲惨な歴史を経験したはずの、あるアフリカの部族を訪れたときの体験に触れ、その部族には、その悲惨な歴史にもかかわらず、他者に対する「好奇心」あるいは、「他者と通じたい気持ち」があったとも述べている(P59)。

トランフォは自分の観察の正確さを裏付けるべく、トランフォにさきがけてオトミ族のフィールドワークにあたったメキシコの人類学者ゴメス・ロブレダ(Gómez Robleda)の著作、『オトミ族の精神的外見的特質の観察研究(El estudio biotipológico de los otomíes)』(México:U.N.A.M, 1961)を引用している。

トランフォが、同書から引用するロブレダの指摘は「オトミ族の大人の表情には賑やかさが一切見られないだけでなく、その子供の間でも賑やかさが確認できるのもわずかその50％に過ぎない」のであり、「オトミ族は表情表現が乏しく、そのＩＱは、特に集中力と想像性の面においては、四歳の子供に相当する」そして「オトミ族には『コミュニケーションの乏しさ』『おとなしい』『他者にたいする不信感』『他者に対する無関心』という四つの基本的な特質がある」等々、多少ニュアンスは異なるものの基本的にはトランフォ氏の感想を裏付けるものである。トランフォも、ロブレダがおこなった「オトミ族に対するＩＱテストの結果」なるものの結果についてはさすがに意見を保留しつつ、「西欧的な教育に対するオトミ族の反感の結果の可能性もある」と述べてはいるものの、基本的にはロブレダとトランフォの二人が、そのそれぞれの調査から、オトミ族の「笑いの欠如」という認識を導いていることが注目される。

トランフォが訪れたメスキタル地域は、メキシコの先住民が住む地域の中でもきわめて乾燥しており、土地の痩せた地域として知られている。オトミ族の基本的な食料は「トウモロコシ」「豆」「ウチワサボテン」などで、不作のときは、男たちの出稼ぎ収入に頼れない家族はきわめて深刻な食料不足に陥って「ネズミ」「蛇」「トカゲ」を食べることもしばしばあるという。また、オトミ族は「サボテンからできたぬるぬるとした酒」を愛好し、ビタミン、たんぱく質、ミネラルがふんだんに含まれていることから、オトミ族は男性だけでなく、女も子供も日常的にこの酒をよく飲むという。

このようにオトミ族の生活を客観的に記述するあたりは、いかにも人類学者だが、トランフォの観察力は、ときおりラテン世界の人間に特有の価値観と感情によって、いささか偏らされる。とくに彼が「発見」したオトミ族の「笑いのなさ」は、彼にとって衝撃だったようで、これについてトランフォはかなり感情的な判断を下している。「オ

トミ族の夫婦関係においては、妻による夫に対する熱烈な愛の表現が計算に入っていない。また、夫による妻に対するちょっかいもない。オトミ族の夫婦関係には、暖かみが欠けている」(『メスキタル地方のあるオトミ族の村における生活と呪術』P125)。

「オトミ族の姑と嫁の関係には、西欧における姑と嫁の関係と通じるものがない。オトミ族の姑は、嫁を娘の一人として見なすが、彼らは感情の関係よりも、労働力の関係を重視している」(同書P135)。

「昼の間、沈黙は絶対的である。男たちは畑へ出かけ、若い青年は家畜に牧草を食わせる。家と家の間の距離が離れているために、女性同士の会話はほとんどないと言っていい。この点において、わがイタリアの農村の状況とは大いに異なる。イタリアなら、旅人に話かけ、畑から畑へと農民たちが話し合い、女たちは門から門へと会話をかわす。オトミ族の女たちは、自宅にいても沈黙しているし、子供たちは決して大きな声で笑わない。夜になると、この状況はいくらかよくなる。畑から戻ってきた男たちは、家族団欒で、夕ごはんを食べながら、話し合ったりする。子供の声がそれにまじり合い、しかる母親の声も聞こえてくる。ときたま笑い声もするが、それは決して多くない」(同書P81~82)。

トランフォやロブレダの観察のなかでは、オトミ族の笑いの欠如は劣性の表れ、あるいは「痛々しいトラウマ――いわゆる精神分析でいう精神的外傷――」の証拠と受け止められている。ラテン世界的な価値観に生まれた人々にとって、人間が笑わないということは、ある種、想像を絶した異常な事態であって、したがって、そこにはなんらかの精神的な障害があるに違いないと、彼らは結論づけるのである。

ラテン世界出身の人々、すなわち中南米の支配層=都市に住む白人たちにとって、オトミ族に限らず、メソアメリカの先住民の人々は、どれも同様にロブレダが確認した「おとなしさ」「不信感」「無関心」「コミュニケーション

の乏しさ」といった特質を備えているというのが「自明」であって、それは支配者としての彼らに複雑な感情を与えている。ラテン世界の強い影響下にある都市住民は辺境の山中に暮らす先住民の人々に対して、トランフォとほぼ同様の感情を抱いているといってよい。都市住民は「インディオ」という言葉から、「諦めと無気力さ」「教養のなさから生まれる迷信」「貧しさと無知さによる病」「おとなしい礼儀正さ」「ほこりっぽさや不潔」「アルコール中毒」を連想し、「礼儀正しくても地味でおとなしい」インディオの顔には悲しみはあっても、笑いがないというイメージを潜在的に抱いている。この「笑いの欠如」は都市住民にとって、白人と先住民の混血であるメスティソ（メキシコの人口の70%を占める）や純粋な白人と、先住民とを隔てる大きな差異として認識されている。

メキシコで支配的な、いわゆる「インディオの無愛想」という常識も、この「笑いの欠如」というイメージと深く関わっているようで、メスティソ／白人と先住民の間では「インディオの笑いの欠如」という迷信が、コミュニケーション上の大きな壁になっている。ラテン世界では「お喋り」「笑い」「表情の豊かさ」を人間に備わった自明のものとし、善としている。トランフォを始め、ラテン文化の影響を強く受けた人々にとって「笑わないインディオ」というものは、畢竟、馴染めない相手なのであろう。

(2)本当に先住民には笑いがないのか

同じラテン世界出身の人類学者で、トランフォ同様、オトミ族の精神世界にアプローチしながら、トランフォとはまったく対立する結論を導いたフランス人に、ジャック・ガリニエがいる。ガリニエーは二十年に渡って、メキシコとフランスの間を往復しつつ、オトミ族の実地調査を重ね、『世界の半分』を上梓した。

ガリニエは長期に渡ってオトミ族の社会に入り込み、それを観察しつづけて来ただけに、オトミ族の共同的な観念の核心をよくつかみだしているように思える。七百ページにも渡るこの労作で筆者が注目したのは、ガリニエが、

オトミ族には日々の生活や祝祭を通じて「宇宙の安定をはかるため宇宙をエロス化する(los otomíes tienen la misión de erotizar el mundo)(同書P8)」すなわち宇宙を官能で満たすという観念があるということを指摘していることである。

周知のように征服者コルテスによって滅ぼされたアステカ族は、ピラミッドの頂上で捉えられた生贄を殺害し、その血を太陽に捧げるという残酷な儀式で知られる。アステカの観念では、太陽はそのエネルギーを放出しながら、徐々にその力を弱め、ついには夜によって殺されてしまうという危機を毎日繰り返している。その弱まりつつある太陽に生贄の血というエネルギーを注入することで、太陽の力を復活させようという思想が、この生贄殺害の儀式の背景にある。「宇宙を官能で満たす」というオトミ族の観念が、アステカ族のそれと深い関係にあることはいうまでもない。

ガリニエはオトミ族の外見にとらわれず、彼らのうちにきわめて豊穣な観念があることを見てとった。ラテン的感覚からすると、まったく無表情なオトミ族の人々の顔の裏には、豊かな精神世界が潜んでいることをガリニエは指摘している。同じラテン世界の出身者であるガリニエとトランフォだが、この二人の間には大きな観察力の違いがあると言わざるをえない。トランフォはオトミ族の男女関係に、ラテン人にとって重要な、男が女をからかって誘ったり、あるいは女が男に対してコケットな態度をとって誘惑したりという性的な戯れ、ゲーム性をまったく見いだすことができなかった。そこでトランフォはきわめて短絡的に、彼らの人生は実に退屈なものであると即断する。ヨーロッパのラテン世界から、異質な先住民の世界を訪れた人間にとって、オトミ族の日常生活は悲しさそのものに見えてしまったようだ。しかし、性を武器に宇宙をエロスで満たし、崩れつつある宇宙のバランス回復を図ろうとするオトミ族の夫婦関係は、ガリニエによれば、トランフォの嘆くほど悲しいものではないのである。

ガリニエによれば、オトミ族には二つの笑いがある。その一つは祝祭の時に表れる聖なる笑いであり、もう一つは日常生活の中に表れる、さり気ない笑いである。これについて、ガリニエは三つのことを述べている。「(ガリニエの研究は)長年に渡る、多くのオトミ族の男性や女性との感情的かつ知的な関係の成果である。これについては、とくにオトミ族の女性たちに感謝を述べたい。私の味方になってくれた彼女らには笑いがあり、並外れたユーモアがある。また男達を危険な知識の道へ誘うような、挑戦的で繊細な産婆術もある」(同書P15)。

ここでいう「産婆術」とは哲学用語で、ソクラテスの用いたいわゆる「問答法」のことである。対話によって相手の漠然とした不確実な知識を、正しい概念に誘導することを指しているが、これによっても、ガリニエがオトミ族の人々と相当豊かなコミュニケーションをくりひろげたことが推し量れる。ガリニエの指摘は、トランフォの「オトミ族の夫婦関係に暖かみが欠けている」とか、ロブレダの「オトミ族の表情表現が乏しく、そのＩＱが、特に集中と想像性の面においては四歳の子供に相当する」といった指摘と、まったく一致しない。筆者は、日常生活に登場する笑いに関するガリニエの次の証言に、その差をいっそう強く感じる。ガリニエは次のように述べている。「インディオの習慣よれば、家以外の場所で体を洗う場合、男と女は守らなければならない決まりがある。男女は同じ所で入浴してはいけないということで、女性達は洗濯の場でもある川で入浴できるのに対して、男達は森に隠れている泉を使用できる……家で体を洗う時に、家族一同テマスカル（Temazcal）を使う（テマスカルとは、メキシコの先住民が愛好する一種のサウナ風呂のこと)。夜になると、あちこちのテマスカルから火の光が見えてくる。そして、熱くなった石の上に水をかけることで、蒸気が、部屋中に広がった時、家族一員一員がお互いに体を枝で叩きあう。そういう時に、じゃれたり、遊んだり、大きい声で笑ったりする人の声が聞こえてくる。魅惑的な雰囲気に包まれたこのような共同入浴を見た者は無関心でいられるだろうか。……ある晩のことだ。入浴から上がったばっかり

の爺さんは、いたずらっぽい声で私の耳に次の言葉をつぶやいた。「おれの体がリフレッシュされた。今なら光が見える」と。一見すると特別な意味を持っていないように見えるこの文章が、長い間、私の頭の中に残った。その隠された細かいユーモアを理解できたのはずっと後だった。その時初めて私は「火」「人間」「テマスカル」とのあいだの恋愛的な関係に気付き、体の悦びはすなわち「光を見る」ことにあたると悟った」（同書P151）。

オトミ族のテマスカルの感覚は、日本人が銭湯に入る感覚とよく似ているようだ。上で述べられている「家族風呂」あるいは「共同風呂」の表現だけからは、参加者が全裸でテマスカルに入るのか、それとも西洋のローマ人のサウナのように入るのかは明確ではない。また、家族が一人残らず一度にテマスカルに入るのか、それとも順番に男性と女性のグループが入るのかも判らない。ただ、夜の静けさの中で、ガリニエの描写から浮かびあがる心と体が温まるテマスカルの存在が、オトミ族の人々にとって、とても大きなものであることだけは確かだ。

オトミ族はテマスカルという場で家族と「じゃれたり、遊んだり」あるいは「大きい声で笑ったり、ふざけたり」する。しかも、それだけに止まらず、テマスカルの空間にはもう一つの次元がある。ガリニエが指摘する通り、アニミズム的世界に生きる先住民の人々にしてみれば、テマスカルとは単なるサウナ風呂ではなく、まさしく神としての存在である火と水が交流する「聖なる場」でもあるのだ。

(3)オトミ族の笑いと祭りの場

オトミ族の宗教的な行事は、大きく三つに分けられる。①ある特定の聖人に願いごとをして、世話になった者は、巡礼やお祭りをおこない、そうすることによって、その聖人に感謝を述べるための行事。これはカトリック教の影響が強い。②先住民に共通する伝統的な行事で、共同体の安全と肥えた土地を祈るためのもの。ここでは自然の持つさまざまな力の気持ちをなごませる目的で、人間と神々の会話が重視される。③いわゆる「謝肉際」と呼ばれる

先住民の伝統的な行事。ここでは人間と超自然的な力の語り合いが演じられ、生と死のドラマが再現される。

オトミ族の笑いは、特にこの三番目の祭りのさいに大きく表れる。ある種の遊戯的な行為として展開するこの「謝肉際」では、「御先祖様の有力さが遊びという動きの増幅器によって明白になる」（『世界の半分』P341）と同時に「謝肉際に歌われるすべての唄にはふんだんなる性が登場し……神々の訪れが官能的な悦びの隠喩を用いて儀礼的に表現される」（同書P364）とガリニエは説明する。

御先祖様が主人公でもあるこの「謝肉際」には、「官能的な悦びの隠喩を用いた唄」を歌う「年寄り」の役を演じる者が登場する。ガリニエによれば、それは「あの世との語り合いを可能としているこれらの唄は、ふだんは禁じられている。「年寄り」のことばは聖なるものでありながら、不純であり、その不純が明らかに性的な含意から生じる不純である。共同体の男あるいは老婆が、これらの唄の糞尿趣味の冗談に対して、大いなる配慮を示している」と同時に「「謝肉際」のことばが受精的であり、男根の性格を持っている」（同P409）というのである。

ここに年寄りの歌の、二つの例をあげてみよう。（同書P377）

-¿A dónde vas,viejo cojo?　　びっこ爺、どこへ行くの
-Voy a bailar　　踊りに行くんだ。
-¿A dónde vas,viejo tuerto?　　片目爺、どこへ行くの？
-Voy a mirar　　覗きに行くんだ。
-Baila,baila pájaro negro（Testículo negro）　　踊れ、踊れ黒い鳥。

実はオトミ族の言葉では、鳥と睾丸は同音異義語であるため、この歌は「踊れ、踊れ、黒い睾丸」という意味にもとれる。

-Baila,baila gallo　　踊れ、踊れおんどり。

ここでいうおんどりは、「偉い爺」という意味もある。おんどりは太陽の使者であり、その鳴き声とともに夜が終わると同時に、夜に活躍する超自然的な生き物や御先祖様が消えるということを意味している。(同書P601)

-Canta,cabeza de sapo viejo (sapo "we"/gran viejo "tawe")　　歌え、歌え年老いたがま蛙の頭。

オトミ語でがま蛙は"we"と呼ぶ。「偉い爺」は"tawe"と発音するため、ここでは"we"が"tawe"を連想させる。このようにこれらのオトミ族の歌は、同音異義や比喩に基づいて「笑い」をひき起こすと同時に、「多産の生命力を賛美し、宇宙の新しい周期の再創造を誘う」(同書P409)という役割を果たしてもいる。先住民の人々も、我々と同じく複雑な精神世界を持つのであり、「インディオに笑いがない」などという「常識」は、一つの文化から他の文化に対しておこなわれた、暴力的な偏見以外の何物でもないことはいうまでもない。

II　インディオの口承文学に表れた笑い

次にその先住民の笑いそのものの実例として、ひとつの民話を紹介しよう。メキシコの「美術及び文化のための国立審議会・大衆文化庁」と文部省は一九七五年から九十五年の間にメキシコ各地の先住民部族の口承文学を採取し、『Lenguas de México』という十数冊からなる冊子をまとめている。同シリーズは「公立図書館のネットワークを利用して、先住民文化や言語知識の普及、および国文学の創造の育成につとめる」ため出版されたもので、その話を採集した各部族ごとの言語とスペイン語を併記している。このなかには神話から日常生活を描くものまで幅広く、先住民のあいだの口承が集められているが、筆者はそのなかで、タバスコ州のチョンタル族のあいだに伝わる口承を採り上げてみた。

タバスコ州はメキシコの南に地位し、チョンタル族はマヤ族と深い関係にあり、この口承が採集された時点で、三万七百十七人が確認されている。カルロス・バサウリ（Carlos Basauri）の『メキシコの先住民人口第二巻（La población indígena de México Tomo II）』（México: Colección Presencias No.2 Dirección General de publicaciones del Consejo Nacional para la Cultura y las Artes & Instituto Nacional Indigenista, primera edición 1940 / primera edición español 1990）によれば、「チョンタル族は他者に対する不信感が著しく、きわめて無愛想であるが、同じ部族の者に対してはそのぶん、まったく正反対で」あり、「男たちは自分の家族の女性に対してきわめてナーバスで、来客があると部屋の奥に引っ込ませたり、若い娘に男性の顔を見上げることを禁止させたり」する。しかし彼らは「音楽の才能に恵まれており、彼らの音楽や歌はとても賑やかだ」と述べている。ちなみにメキシコの歴史上「最も聡明なインディオ女性」といわれる征服者コルテスの通訳者でありかつその妻となったマリンチェ（La malinche）＝ドニャ・マリア（Doña Marina）は、このチョンタル族の出身であった。

お嫁さんがほしい三人息子をもつ男の話（佐伯直子訳）

＊作者不詳。“Había un hombre que tenía tres hijos que se querían casar”（P. 92-104）in *Relatos Chontales*（México: Serie Lenguas de México, Secretaría de Educación Pública y Dirección General de Culturas Populares, 1994）

「とうちゃん、オレたち女を探しに行くつもりだ」

と三人の息子たちは言った。

「そうか。いいとも息子たちよ」

と父親は答えた。

「女房を見つけてこい。我が家は男所帯だからなあ」
三人の息子はそれぞれ女房を探しに出掛けた。さて、どこで嫁さんに出会ったのか。
長男はイノシシのところに結婚を申し込みに行った。
「あんたのハンモックに座り、腰掛けに座り、胸のつかえを取り除くためにここに来た」
「何を言いたいんだい？　あんた」
「あんたのお嬢さんが、オレのところにお嫁に来る気はないかと、お伺いを立てにきたんだよ」
イノシシのお嬢さん方はすぐで、揃って〝八重歯〟を出して座っていた。母イノシシは言った。
「あそこにうちの娘たちがいるよ。あんたにやれる子が一人いるが、怒らせたらあんたのつま先を食いちぎってしまうかもしれないよ」
「構わない。きっとうまくやるからさ。それよりお嫁にくださいな」
そこで母イノシシは言った。
「わかった、あんたのとこにお嫁に行かせるよ」
「よしきた。しかじかの日に迎えに来るよ。弟もお嫁さんを探しに出ているんだ。どうしているかな……」
さて、次男は道を行くカニを見つけたので、結婚を申し込むところである。
「カニ子さん、どこ行くの？」
「あっちの方。ただの散歩なの」
「そうかい、結構だね。ところでオレたち結婚しないかい。」
と、次男はカニ子を口説くのであった。

「さあ、どうかしら」
「よく考えて！　そしてきっぱり決めてくれよ。兄弟はきっともう、嫁さんを見つけたはずだ。しかじかの日に三人揃って式をあげるつもりなんだ」
「そういうことならあんたと結婚するわ。一緒に来てくれる？　ママに聞いて、婚約しないと」
「よしきた。行こう」
次男は婚約を成立させようとする。
「はじめまして。このたびは先刻出会ったお嬢さんが、オレのお嫁さんになってくれるので、婚約するために来ました」
カニの母親は賛成してくれた。
「娘をあんたのところへやりましょう。ただし、娘にトルティーヤを焼かせては困りますよ。なぜなら、火を焚くときに両手のハサミを出しただけで、火傷して、ハサミがとれてしまうからね」
「ああ、構いません、構いませんとも」
奥さんを探していた三男も、じきにガマ蛙に出会った。ぴょこたん、ぴょこたん道を行く、大きなガマのマリアである。
「どこいくの」
「あてはないわ。ただの散歩よ」
「君、名前は？」「私はガマのマリアよ」
若者はそれ以上言わなかったが、末っ子は最初から運がよかった。なんとなれば、ガマのマリアは精霊だった

から。

「俺と結婚してくれる？　きっと兄さんたちはもう奥さんを見つけたと思うんだ。三人とも奥さんを探していて、そろって結婚式をあげるんだ」

「そんなら、私、あなたと結婚するわ」

「しかじかの日に結婚しよう。いずれ知らせに来るよ」

三人は父のもとへ帰ってきた。

「さて、嫁さんは見つかったかな？」

長男は答える。

「見つけたよ」

「どこで？」

「あっちで見つけた」

「そうかい、よかった。で、おまえは？」

と、父親は次の息子に聞く。

「僕はカニと出会ったんだ。でも、その娘はトルティーヤを焼けないんだ。だって火にかざすと、ハサミが取れて落っこちてしまうんだって！」

「そうか。まあ、構わないさ。で、おまえは？」

と末っ子に聞いた。

「僕はガマ蛙をお嫁さんにもらうことにしたよ」

「やれやれだな……ま、それでもよくやった。しかじかの日に結婚式をあげるから、お嫁さんの母親や、父親や他の皆に知らせてこい」

三人は結婚式を知らせに、皆のところに出掛けた。

末っ子はガマのマリアに、結婚の期日を知らせに来た。

「君を迎えに音楽隊がやってくるよ」

「わかったわ。その人達が来る前に、あなたは先に来て、私の口の中に息を吹き入れて、私を風船のように膨らませてちょうだい」

「よし、わかった」

「きっとそうしてちょうだいね。私の皮が透き通って、そして体が大きく膨らむまで、口から息を吹き入んでちょうだい。そして勢いよく息を吹き入れたら、私は破裂します」

末っ子はガマ蛙の花嫁のお迎えが来る前にやってきて、花嫁の口から息を吹き入んだ。すると、なんと！　見る見るうちに腹は脹らみ、皮は薄くなった。まるで風船のようだ。そしてはっと気づいた時には、〝パーン!!〟と破裂！　するとどうだろう！　その後からお姫さまが現れた。なんと美しいことか。まるでこの世のものではないかのようだ。末っ子は、幸運にも美しいお嫁さんを見つけたのであった。

やがて結婚式の日が来た。花嫁のお迎えが来た。まずイノシシ、そしてカニが静かにおごそかにやって来た。ガマ蛙の花嫁にも迎えが来た。盛大な披露宴が開かれた。ついに三人息子は結婚したのだった。

「さて、息子たちよ。すでにお前たちは所帯を持ち、一家を支えていくことを考えなければならない。それぞれに考えを聞かせてもらおうか」

と父親は言った。カニの夫が応えて言った。

「もう言ったけど、オレの女房はトルティーヤを焼くことができねえ。なぜなら、炎に当たると、ハサミが取れてしまうからなあ」

イノシシのお嫁さんは怒ると足に噛み付くけれど、ま、それは仕方がない、と皆は納得した。かくして新婚さんたちは働くようになった。ガマのマリアもよく働いたが、マリアはお嫁さんになったり、蛙に戻ったりした。なんといっても精霊だったから。

あるときガマのマリアは夫に言った。

「明日、あなたのアトレ（トウモロコシを煮、それを漉して作った粥）は私が作るわ」

「それはいいね」

マリアは台所で働いたが、兄はよもやアトレを作っているのが弟の奥さんだとは気付かなかった。兄がトウモロコシを挽くための板を持ち上げると、「チ、チ、チ」という歌声がふるいの中から聞こえてきた。そこで見てみると、アトレの中で泳ぎまわっている物がある。兄はカンカンに怒った！

「アトレのふるいをちゃんと見張っていないとだめじゃないか！　ガマ蛙が中で泳いでいるぞ！」

そして、兄はガマ蛙の足をつかみあげると、外に放り投げた。それは弟のお嫁さんだったのだが、兄はそうとは知らなかった。そして、

「アトレをほったらかしにして出ていった奴はもう台所に入れないようにしようぜ。ふるいの中で、ガマ蛙が泳ぎ回っていたんだぜ。」

と、父親に言いつけに行った。

「そのガマ蛙はどこだ」
「足をつまんでぽーんと外に放り投げたさ」
「何だって！　お前、ありゃ弟の嫁さんじゃないか」
「あっ、そうだった！　探してこよう」
二人はガマのマリアを探しに出た。アトレを作っていたガマのマリアは、足がもつれてぶっ倒れていた。
嫁さんたちは粉を挽き、トルティーヤを作って働いた。しかし、カニ子はトルティーヤを作るように命じられなかった。理由はすでに述べた通りである。そこで残りの二人の嫁さんは、二人だけでトルティーヤをこしらえていた。
「ねえ、ねえ」
と二人の嫁さんが言った。
「私たちだけがトルティーヤを焼いているじゃないの」
「あのカニ子は焼かないわね。なぜ火に近づかないの？」
「焼いているのは私たちだけだわ」
「あの子が旦那に食べさせるトルティーヤなんて、あるもんですか」
「作りもしないのに！」
「こうなったら、是が非でもトルティーヤを焼いてもらいましょう」
肉は買ってあったので、トルティーヤを作るところであった。
「今日はトルティーヤを作る日だわ」

「あの子に焼かせましょう」
「そうしよう」
トルティーヤを焼く番がカニ子に回ってきた。他の二人は自分たちばかり焼いてきたことにプンプン怒っていた。しかたなくカニ子はトルティーヤを焼いたが、盛んに燃え上がった炎が、カニ子のハサミに触れたとき、カニ子のハサミはトルティーヤを焼く様子を見張っていた嫁さん二人の見る前で、ポトリと床に落ちた。カニ子のハサミが落ちたので、炎が上がった瞬間、トルティーヤの塊は床に落ちてしまった。
「もう、どうしようもないわね。あの子はトルティーヤを焼けないわ」
イノシシの嫁はぶたれるたんびに怒って、夫の足を噛み付いた。こんな風にして過ごすうちに、この家ではそれが当たり前になった。こうして三人息子は結婚し、長男はイノシシと、次男はカニ子と、そして三男はガマのマリアと結ばれたのであった。

上記のチョンタル族の嫁さん探しの話には、ガマ蛙が美女であったり、蛙がふくらんで破裂するモチーフなど、すでにヨーロッパの童話の影響が感じられる。先住民文化に対するヨーロッパからの影響は、すでにコルテスの征服直後から始まっており、チョンタル族のように独自の言語を持ち、その伝統的な生活を守ってきた部族にも、その影響が及んでいる。メキシコ先住民の民話を研究したロバート・M・ローリン（Robert M. Laughlin）は「もし、我々が民話の内容を今以上に注意深く分析したら、おそらくどの民話の中にも西欧の要素を一つぐらい発見することができるであろう。メキシコの民話は四百五十年をかけてスペインから来た口承文学を変形してきた……メキシコの民話の中には十二世紀に遡る十字軍と共にヨーロッパに渡った中東の物語の影響をはじめ……ヨーロッパ、ア

フリカ、アジアの物語の影響がうかがえる」と、彼の著作、『シナカトラン：その歌と夢(Zinacatlán:Canto y sueño)』(México: Colección Presencias No.62 Dirección General de publicaciones del Consejo Nacional para la Cultura y las Artes & Instituto Nacional Indigenista, primera edición 1988 / primera edición español 1992)（P32-33）のなかで述べている。

とはいえ、この話の中には、都市のラテン文化を遵守しようとする白人支配層の感覚ではとうてい理解しえない、先住民庶民のユーモアが溢れていることは間違いない。せっぱつまった男所帯にとって嫁は不可欠である。才色兼備の「理想的なお嫁さん」を探す暇などありはしない。ガマ蛙だろうが、イノシシだろうが、カニだろうが、とにかく一日も早く、嫁を迎え入れるのが先決なのである。

ここで言うカニやイノシシはおそらく先住民のシンボリズムに繋がっている。ガリニエは『世界の半分』で、オトミ族の抱いている同文のイメージについて触れ、カニは月の女神の世界に属していて、水の世界と関係がある。イノシシはエネルギーに溢れていることで知られ、悪魔(ここで言う悪魔は、カトリック世界で言う悪魔とは異なり、闇の神、呪術師の保護神であるテスカトリポカ＝Tezcatlipoca に近い。闇と暴力の支配者であり、財宝と災厄の両者をもたらす神である)の世界に属している。実際、オトミ族の間では、狂気を治癒するための飲み薬としてイノシシの棘が使われるという。

この話の理想的な美しい恋愛などそっちのけで、とにかくあわただしく結婚するという過程の可笑しさは、落語の「持参金」にも似ている。筆者はこの話を読んで、かつて米朝の落語で大笑いさせられた、長屋の繁さんが不細工なうえに他の男の子供を孕んだ年増女と見合いしてしまう話を思い出した。

嫁選びをする三人の若者は、相手の欠点には眼をつぶって結婚する。多くの先住民の部族の間では、結婚を望む

男性は、相手の娘の家に行って相手の両親に娘を自分にくれるよう所望するが、相手の両親はそれを三度断るという習慣があるという。「うちの娘は出来が悪いものだから、とうてい貴方のお嫁さんにはなれませんよ」と断るのである。これは後々のトラブルを防ぐための生活の智恵であろう。

このお話では、火に当たると「ハサミ」が落ちてしまうから、料理ができないとか、怒ると相手の足に噛みつくといった、困った嫁さんが来ることになるわけだが、それでもお互いに慣れれば、不自由は不自由でなくなり、平和な家庭が成立する。トランフォの言うインディオの「冷えきった関係」というのは、こうした理想的な恋愛よりも実利的な結婚を重視する先住民の結婚制度の故なのかもしれない。しかし、所詮、結婚というものは恋愛であろうと、見合いであろうと、世界中どこでもこのように不自由なものなのかもしれない。この話の中には普遍的な笑いがある。

ガマ蛙のマリアは、ヨーロッパの話とは違い、ガマから美しい娘になるのではなく、ガマになったり娘になったりと、日々変身を繰り返す。先住民の信仰には、洞窟に住む精霊(Encanto)の娘である彼女は、主人に多くの富をもたらすということになっている。同じ『Lenguas de México』のシリーズ中の、ツォツィル族の説話に、ガマのマリアとよく似た人物が登場する『X'Anton y el zorro』という物語がある。(Alonso Ramírez Hernández, México: Serie Lenguas de México, *Relatos Tzotziles*, Secretaría de Educación Pública y Dirección General de Culturas Populares, 1995)

山奥に入って狩りをしたり、自然の果物を食べたりすることを趣味している若者が、ある日、大蜥蜴に食いつかれ、食われそうになっていた森の神に出遇う。食われまいと必死の森の神は、「頼むから、私の家へ戻って鉄砲をもってきてくれ」と若者に助けを求める。森の神の家は洞窟で、その入口を見張っているのは森の神の娘、X'Antonで

ある。青年は鉄砲を求めて洞窟の入り口に立つが、いくら周囲を見回しても、そこに森の神が言った娘の姿などない。いるのはガマ蛙が一匹だけである。しかたなく森の神のところに戻った若者は、娘の姿なんかどこにもないと告げるが、森の神は「洞窟の入り口にいるガマが私の娘なんだ」と言う。

若者は洞窟の入り口に戻り、X'Antonの名を呼ぶ。すると「ガマ蛙は美しい女性に変身し」事情を聞いて、若者に鉄砲を渡す。結局、鉄砲の力で森の神は大蜥蜴を殺すことができ、若者にお礼として財宝を渡そうとするが、若者はそんな財宝よりガマ蛙のX'Antonを妻に欲しいという。結局、若者はX'Antonを娶り、子供もできるのだが、若者は妻と子供を大事にしなくなるため、X'Antonは「不純な関係（すなわち人間と神の）」から生まれ子供を置いて、父の元に帰る。そのさいX'Antonは、自分の子供にトルティーヤと煮豆が食べたくなったら鍋と鉄板を手に触るように、またアトールを飲みたくなったら、碗に手で触るように説明する。森の神の娘は限りなき富と食べ物をもたらす者であり、かつ恩を忘れた者に罰を与える者でもある。この話の結末はX'Antonが子供を苛める夫を、いつも食べ物を得るために命を危険に曝さなければならない狐に変身させ、ふんだんに実る木の実を食べることで、食べるのに苦労しない可愛いリスに子供を変身させるところで終わる。

これを見ると、彼女と結婚した三男は、兄弟のうちで最も運がよかったことになる。同時に、このガマは美しい娘に変身できるわけでもあるから、ますます三男は運がいいということになるが、ここの話の中では女性の美醜は問題とされていない。たまたまガマのマリアは美しい女性になれるというだけであって、それは偶然なのである。美しいことは嫁として不可欠な条件というわけではないのだ。これは都市を中心とした、西欧的な価値観に生きる人々にとっては、とても考えられないことであろう。

この話ひとつ見ただけでも、メキシコの山奥を含む農村地帯には、豊かな口伝文学の世界があり、そこには語り

を作ったり、聞いたりする習慣があることが判る。メキシコ全土につながる指摘かどうかは即断できないが、M・ローリンには、少なくともシナカンタン族に限って言えば「彼らの共同体において、語りの才能は名声を得るための手段とはならない。名声を得るなら、他の分野で浮かび上がるしかない。しかし、語りの才能を持った者は周囲の者に認められ、大事にされているのは間違いない。『語り』を専門とする『語り部』はいないが、説話を語る者の豊かな表情を見たときのシナカンタン族の人々の顔は喜びと解放感に溢れていることを実感した」と述べている。そして「通夜の時に説話を聞いたり、仕事を終えた時、歩きながら説話を聞くことはあっても、公の場で説話を娯楽として聞くものはいない。来客があったり、あるいは過去の出来事を他者に伝えたいときに説話は語られる。シナカンタン語の読み書きができる者はいないのでこれらの説話は、共同体の財産の一部とみなされている」とも述べている。(『チナカトラン――その歌と夢』P31-32)

いずれにせよ、このような「お話」に触れると、我々は先住民の世界に潜む文学的価値に対して、無知に近いと認めざるを得なくなるのが現状である。先住民のこうした宇宙の再生を助ける宗教的な笑い、あるいは家庭の団欒、あるいはお通夜のような空間で展開される笑いは、征服以降のメキシコの長い歴史の中でどのようにヨーロッパから来た笑いと混交しながら、今日のメスティソの笑いを生んだのか。興味深いテーマではあるが、先住民の笑いの研究が遅れているだけにその分野はまだ暗い。

先住民の笑いは一般のメキシコ人を初め、多くの外国人にとっても未知の世界ではあるが、決して理解不可能な世界ではなく、人類の財産として認め得るレベルを持った笑いのはずだ。その意味で、先住民の語りや祈禱の歌のスペイン語訳に、原語の持つ(同音異義語の使い方、シンボリズムなどの)味を、より正確に解析する作業が必要ではなかろうか。